

リレーエッセイ・  
海外派遣  
専門家たより

よし だ しょうへい  
吉田昌平

横浜国立大学留学生センター教授



熱心にドラマ「世界の中心で、  
愛をさけぶ」に見入るカイロ大  
学の学生たち

写真提供：筆者（以下も同じ）

# 共感にあふれた セカチュウの授業

カイロ大学文学部で日本語を教える

2005年  
2月10日

日から5月9日ま  
で、ジャパンファ  
ウンデーシヨンの  
日本研究客員教授  
派遣プログラムに  
よりカイロ大学文  
学部に派遣され、  
日本語、言語学、  
研究方法の講義を  
担当した。

遠くにギザのピ  
ラミッドを眺め、  
中世イスラームの  
栄華の跡と中東・  
アフリカ最大の近  
代都市の喧騒が混

在する都、カイロ。私にとって  
カイロは、30年前に初めて住ん  
だ異国の町だった。その後、英  
国と豪州に十数年暮らすことに  
なったのだが、エジプトが妙に  
懐かしい。だから、カイロ大学  
から教えるに出来ないかと打診があ  
ったときは、ぜひやらせてくだ  
さいと申し出た。派遣内定後は、  
授業の準備、アラビア語のブラ

ッシユアッブに努め、エジプト  
の学生を教えることをとても楽  
しみにしていた。

ナイ

ル川の中洲のアバ  
ートから白黒タク  
シーで通ったカイロ大学は、17  
学部と6つの研究所からなる中  
東、アフリカ最大の大学だ。パ  
レスチナの故アラファト氏とい  
ラクのフセイン元大統領もカイ  
ロ大学の学生だった。学生数23  
万人のキャンパスのなかは、明  
らかに塙の外の世界より人口密  
度が高く、行き交う学生で込み  
合っている。

所属先となった日本語・日本  
文学科は、学生数2万人を有す  
る文学部にあり、1974年に  
開設された。文学部の14学科の  
なかでも、英語学科に次いで入  
学希望者が多く、入学するため  
には高校の第2外国語（英語、  
フランス語、ドイツ語等）と、高  
校卒業時の全国統一試験の国語  
（アラビア語）において上位10%  
に入っていないければならない。  
学生の入学動機としては、日  
本への憧れ、日本語、日本文化

への関心、日本の経済力、技術  
力への興味、日本語、日本文化  
の教師になりたい、観光ガイド  
になりたい等があげられ、特に  
女子学生に人気がある。

カイ

ロ大学の男子学生  
生と大差がない洋服姿だ。イス  
ラーム原理主義者が好んで着  
る、長袖長衣の民族衣装ガラバ  
ーヤの着用は、学内では事実上  
禁止されている。女子学生のフ  
アッシヨンで目につくのが、髪  
と耳とノドを隠すヒジャーブ  
（スカーフ。エジプトでは「ヒガー  
ブ」と発音）だ。70年代のカイ  
ロでは、ヒジャーブの女性が少  
数派で、髪を出した女性が多数  
派だった。伝統的価値観への回  
帰だろうか。30年の間に立場は  
逆転し、ヒジャーブ着用者が主  
流派となった。学生の多くも、  
彼らの祖母が若いころはヒジャ  
ーブを被っていたと言っ  
カイロの「六本木」にあたるザ  
マーレク地区にあるヘルワーン  
大学美術学部や、裕福層の子弟  
子女が多いアメリカン大学の周

よしだ しょうへい ●サウジアラビア、エジプト留学後、ロンドン大学UCL修士課程、同SOAS博士課程修了（言語学博士）。オーストラリア国立大学講師、助教授、横浜国立大学助教授を経て現職。著書・論文に「日本語でボランティア」「Vowel harmony in Palestinian Arabic」など



りでは、ヒジャーブを被らずにTシャツにジーンズ姿で闊歩する女子学生が目につく。それと比べるとカイロ大学の学生は保守的のようで、女子学生の半数以上が、ヒジャーブに長袖姿だ。

一方、何も頭に被らない女子学生や、ヒジャーブより保守的で腰のあたりまですっぽりと隠れるヒマールをまとった女子学生は少数派となる。今のエジプトでは、ヒジャーブ着用者こそがファッションにおいても主流派の感がある。ヒジャーブの色、柄、素材に凝ってみたり、ヒジャーブの留め方や待ち針の数を日によって変えてみたり、ヒジャーブ、シャツ、パンツを上手にコーディネートしたりと、お洒落に余念がない。

## 3年

生、4年生、大学院生の授業を担当したが、4年生の授業は日本語音声学だった。教えてみると、学生は国際音声文字が苦手だったようなので、慣れるようにまずアラビア語を音声文字で表記する練習をさせた。アラビ

ア語の語句は、コーランや流行歌から引用した。コーラン読誦学の規則を学んだ経験とアラブ流行歌を知っていたことが、思わぬところで役に立った。

大学院生の「購読」の講義の時間には、映画やドラマを使った授業をやるうと決めていた。日本の大学でも留学生のための日本語の授業で実施してきたが、学習動機が維持でき、日本に住んでいても意外に学べない口語表現が学べると好評である。

経験上、映画やドラマは、「笑えるもの」「泣けるもの」「年齢等、登場人物と学習者の立場が似ているもの」等が、日本語



宿泊先に学生を招いてのエジプト料理パーティ

教材として成功する。目星をつけたビデオやDVDをいくつか見た末、TBSドラマ「世界の中心で、愛をさけぶ」を使うことにした。登場人物の年齢は適当だし、純愛なのでイスラーム圏でも倫理上の問題はない。

試しに全11話を見てみたところ、泣けた。日本人が涙する場面、エジプト人学生は泣いてくれるのかどうかが一番の関心事だったが、悲しい場面では、みな涙を流し、次回の授業を心待ちにしてくれた。全編8時間46分の台詞の文字起こしと教材作成のために、休日を返上することもあったが、思い出に残る授業となった。

## エジ

プト人学生の印象は、「礼儀をわきまえている」と「人懐っこい」の2点に尽きる。3世代同居が珍しくなく、また下町的な近所付き合いで日ごろから近所のオジサン、オバサンと接していることを考えれば、エジプトの若者が年長者の言うことをよく聞き、目上の者を立てるように育

つこともうなずける。と同時に、エジプト人は、アラブ諸国の人々のなかでもひとときわ明るい性格をもつ国民だ。学生は私に親しんでくれ、政治から結婚観まで語り合った。その明るさと純粹さを私は忘れない。

最近、アラブ人やムスリムがネガティブな文脈で語られることが多いようだ。日本の大学の授業で、学生の抱くイスラームのイメージとその出所について学生自身に調べさせたところ、「男尊女卑」「テロ」「狂信的」「自由がない」などの語が並んだが、イメージ形成のきっかけは、マスメディアであった。

しかし、私がエジプトや他のアラブ諸国で出会ったのは、男女平等の精神をもち、暴力を憎み平和を愛し、個人の自由を重んじる人々だ。そして、イラクへの自衛隊派遣後も、変わることもなく親日派でいてくれる人たちだ。アラブ諸国の普通の人々の普通の生活を日本の大学生に伝えていくのは、私の使命の一つだと思っている。